

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04111

研究課題名(和文) 現代農村における営農志向と生活史：農業近代化の経験と記憶の交差

研究課題名(英文) Farmers orientation and life history: The experience and memory of modernization of agriculture

研究代表者

徳川 直人 (Tokugawa, Naohito)

東北大学・情報科学研究科・教授

研究者番号：10227572

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：農業近代化の生活史(経験とその記憶)を、農家自身が残した資料(ヒューマンドキュメント)や述懐、質問紙によるインタビューや自由な形式のインタビューによって発掘し、今日の営農志向がどのような歴史を経て形成されてきたものか、と同時にどんな別様の可能性があったか(オルタナティブな展開可能性)を探った。

対象としては、申請者がフィールドとしてきた北海道および東北地方の農村のうち、特に、大型酪農地帯である北海道別海町においてパイロットファームから新酪農村に至る近代酪農の展開を経験した豊原地区と、これと連動ないし対峙する動きとして同町内および周辺にひろがるマイペース酪農の運動とを、とりあげた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的忘却の危機にあった根釧パイロットファームについて、当事者の資料を収集し、入植経験者にインタビューすることができた。人々の間でも、その経験および語りには葛藤や多様性がある。最初に語られがちなモデルストーリーは、華々しく喧伝された事業の裏で入植者たちが誉めなければならなかった辛酸の語り、困苦にめげずに事業をなすとげた自負と誇りの語りなどである。これらはしかし固有の語りづらさを抱えていた。さらに聞き取りが進むと、過剰投資の経験をふまえた適正規模での酪農論、あるいは、森林や川の記憶に媒介されたエコロジカルな放牧酪農論のように、ありえたかもしれないオルタナティブについての語りも現れた。

研究成果の概要(英文)：In a crisis of social loss of memory, we have focused on farmers' life history (experience and memory) of the modernization of agriculture, through document collection and interview. Farmers writings like diary or journal have been especially respected here.

We have taken an example of the case of dairy farming in Hokkaido. The experience of the people of Toyohara village is highly important, because the experience is the first case of the mechanized farming, and the farmers' attitude toward it is so divided and complicated. We have abstracted the attitude of pride and praise as well as the movement of protest and alternative construction.

研究分野：社会学

キーワード：農村 生活史 相互行為論

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会的忘却の危機： 北海道別海町の床丹地区で展開された根釧パイロットファーム事業(1955-1965)は、戦後開拓事業の跳躍点であると同時に基本法農政の先取りとしても位置づけられる。かつては小学校教科書や教育用地図帳にも掲載され、そのモダンな風景(広い草地、赤い屋根の牛舎・サイロ、ピンク色に塗られたブロック作りの住宅)は観光名所にすらなり、「まなざされた農業」の先駆事例ともなっていた。

が、今日、これについて部内資料や記念誌のほか参照できる刊行物は稀少であり、いわば社会的忘却の危機にある。専門的な報告も長らく出されていない。現地、別海町を訪れても、人工物としてのその痕跡はもはやほとんど見る事ができない。

(2) 表象の分裂： 他方、一般に抱かれている農業イメージ、とくに畜産・酪農については、「牧歌的な牧場表象」か、あるいは、あらゆる作業が自動機械化されたオートメーション牧場のように、典型的な「表象の分裂」がある。若手農業者にとっても、過去の話はもはや牧歌時代の回顧にしか聞こえていないかもしれない。

実際には、その近代化過程は、採算ベースを求めてさらなる投資を余儀なくされ、生産力を上げればさらに効率化を求められるといったたちごっこ、「ゴールなき拡大」の端緒でもあった。そのことから、土地と草地基盤を積極的に見直す「マイペース酪農」の運動も発生していた。

しかし、一般には、草地酪農が牧歌的なイメージで見られ、他方、厳しさを増す農業情勢の中でメガファーム化・ギガファーム化の道が追求されている。

(3) 生活の観点： こうした中で、当事者の語りや、聞く耳を失っていたのが社会的背景であった。経営改善の観点から草地酪農を再評価した研究は存在したが、より広く、生活の観点からも探究を試みたのが本研究である。

以下、進捗させることのできた「根釧パイロットファーム」の生活史とライフストーリーについて報告する。

2. 研究の目的

農業の近代化——機械化と規模拡大——は、従来の肉体摩滅的な重労働から農民を解放したと同時に、採算ベースを求めてさらなる投資を余儀なくされるラットレース状況の始まりでもあった。

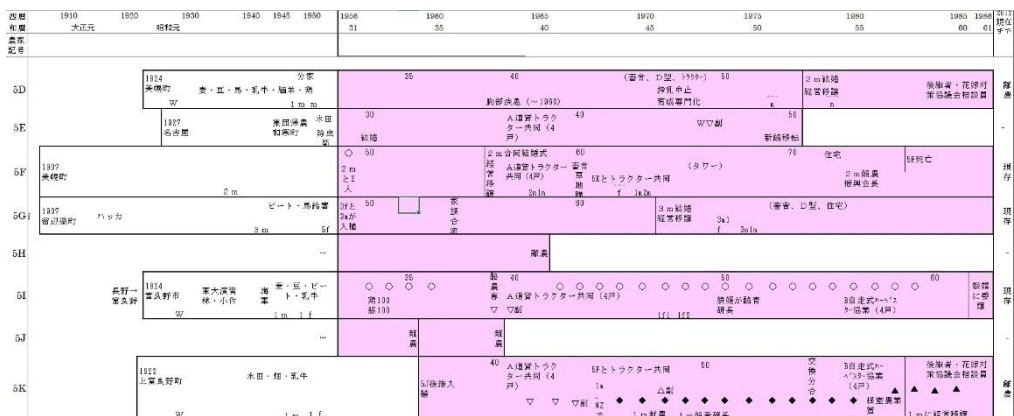
農業近代化の意義をふまえつつも、それ一辺倒になってしまった場合の危険をも記録しておくこと、また、それとの対抗関係の中から持続的な農業に関する思索や運動が現れているというオルタナティブの現実的な可能性を保留しておくことが、研究の目的である。

3. 研究の方法

インタビューと資料収集によって研究を進めた。

また、現地では、上述の忘却に抗い、入植当事者たちによって、開拓の歴史を語り継ごうとする活動や、廃校後の小学校校舎を利用した資料館づくりが進行していた。その動きにも示唆を得ながら研究にあたった。とくに、存続・存命の入植名義者およびその配偶者に対するインタビューと、当事者が書いたものの収集にあたった。

4. 研究成果



【図1】 集団的ライフストーリー (部分)

まず、資料とインタビューから得られた入植当事者たちのライフストーリーを一覧にし、電子ファイル化して、全員分について作表作業をおこなうことができた。地図、年表なども作成した(図1、図2はその一部)。それをふまえ、単に年表的な事実の確認にとどまらず、入植当事者の「経験の語り」に耳を澄ませる作業からは、次のことが明らかになった。



【図2】 地図(一部)

(1) 語りづらさと伝承の衝動

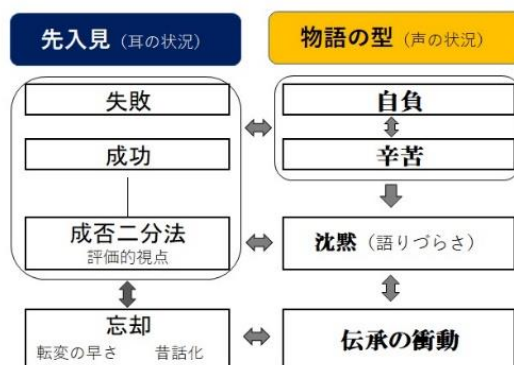
概して苦難の経験であるが、しかし、同一事象の中にあつた人々の間でも、その経験および語りには葛藤や多様性がある。基本的に「語りづらい」性質を持っている。

最初に語られがちなモデルストーリーは、華々しく喧伝された事業の裏で入植者たちが嘗めなければならなかった「辛苦の物語」、あるいは、一見したところそれとは逆に、困苦にめげずに事業を成し遂げ一大酪農郷を建設した「自負の物語」であった。

ただし、聞く側にそのような「成功か失敗か」の成否二分法があると、それに対応する語りも対立をまねいてしまう場合もあるし、それ自体、単純化を伴っているであろう。これが語りづらさのもう一つの原因になっているように見える。

もとより、経験が封印され忘却されてゆくことについては、それ以上の抵抗感がある。ここに伝承の衝動が発生するのである。

こうした構図をまとめてみると、【図3】のようになる。もっとも、如上の事情ゆえ、その表現は、概して、事情を共有でき、あるいは異なる経験や見解であっても尊重しあうことのできる当事者同士の回顧談、記念誌の編纂にとどまってきた。



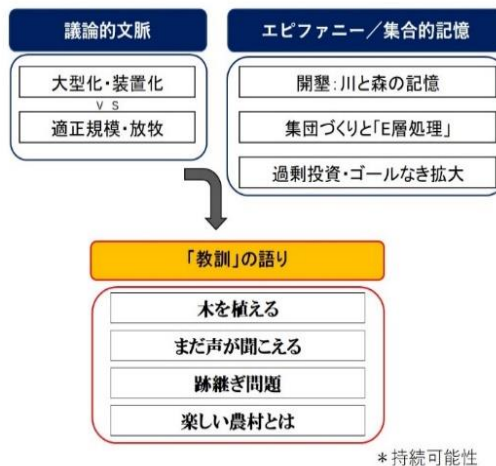
【図3】 語りづらさと伝承の衝動

(2) エピファニーと「教訓」の語り

多様な声を聞きとろうとする姿勢で接し続けると、経験があふれるように語られることがある。その経験のいくつかは一種の「エピファニー」となっているように見える。

そうして語られる経験は、単なる出来事の想起にとどまらないストーリー性をもち、それも議論的な性質を帯びている。どんなストーリーが編まれるかが語り手の置かれた社会的・文化的・歴史的な文脈によって異なり、あるいは甲論乙駁の「議論的文脈」によって異なるのである。

インタビューを継続してゆくと次第に、出来事の記憶や再話が今日の農業情勢との対比によって「教訓」としての意味を付与されてゆく場合がある。たとえば、開拓初期の森や川の記憶によって触発されたエコロジカルな観点からの文明批評



【図4】 議論的文脈と教訓の語り

のように、ありえたかもしれないオルタナティブについての語りが構成される。この点は重要である。

こうした応答関係を概略図にすると【図4】が得られた。

(3) まとめ

艱難辛苦の経験は概して語りづらさを抱えているが、他方、その経験の語りは単に出来事の想起であるばかりではなく、今日の支配的な言説や社会状況との対峙関係によって意味づけられる。語り「伝承」でありうるのは、記録として収集・所蔵・展示されることを通してばかりではなく、語り・聞くことによる意味的触発を通してであろう。

(4) 今後の課題

重要であったのは、このような経験の語り、自己観念や状況定義の葛藤を含んでいることであつた。私たちは誰なのか、ここに住むとはどういうことなのか。住み続けるという生活の観点それ自体が、選別と離農を生んできた歴史と真向かいになることになる。ここは「住んでいる」という感覚のある「固有の意味を持つ場所」であるのか、あくせく働き、自分が味わい価値評価するわけでもない生産物を勝手な値段で持って行かれるだけの「植民地」なのか。牛乳やチーズが「生活文化の表現」になっているかどうか。「プロ農家」ともてはやされる一方で、引退するともう居場所もない生活を強いられているのではないか。「牛飼い」としての生活文化や農民的技術が失われていっているのではないか——等々。

放牧酪農の動きを、このような葛藤関係のうえに位置づけてゆく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 徳川直人
2. 発表標題 農業近代化の経験と語り：根釧パイロットファームの事例
3. 学会等名 日本社会学会第92回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

語り聞く根釧パイロットファーム：農業「近代化」とは何だったのか http://www.sp.is.tohoku.ac.jp/toku/project/pilotfarm.html
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----